

書評

B・A・ルイバコフ『古代ロシア、説話・ブイリーナ・年代記』

B. A. Rybakov, Древняя Русь. Сказание. Былины. Истории. Издательство АН СССР, Москва, 1963, 361 стр.

——ブイリーナ研究における
新「歴史学派」のころみ——

中村喜和

ロシア独特の口承叙事詩であるブイリーナには、どこかしら謎めいたところがある。

このような印象をいっそうつよめているのは、ブイリーナが口承芸術としていまや死滅に瀕しているという事情であろう。かつてブイリーナ王国の觀を呈したアルハンゲリスク・オネガ湖・白海・ペチョラ河などの北部地方でさえ、その語りの伝承は全く衰微してしまつたようである。われわれが知っているブイリーナは、情感にあふれた旋律やレチタチーフォで歌われるそれではなく、研究者によって文字に書きしるされたものに限

られている。いわば、ブイリーナの剝製、あるいは再生したブイリーナである。

かつてM・スベランスキイはその『古代ロシア文学史』の冒頭で、資料の散佚ないしは未公刊のゆえに、そもそもロシア文学の史的研究は可能なりやという問を發したが、この疑問はブイリーナの歴史的研究にとつていままお妥当する。文字で書かれた文学においては、たとえ写本の伝来の仕方がかなり偶然的なものをすくなくからず含むにせよ、古代ロシア文学の發展の筋道は一応明らかにされている。(念のためにいえば、十七世紀あるいは十八世紀の一部を含めてそれ以前のロシアの文学を通常古代ロシア文学と呼ぶ。)事実、スベランスキイもその可能性をみとめたうえで、あの二巻にわたる古典的労作を残している。しかしブイリーナの場合には、口承という本来的な性格もあつて、その古い形は全くといっていいほど知られていないのである。

いまここで、ブイリーナ収集の歴史を多少なりとくわしく述べる余裕はないが、最初の数篇はようやく三五〇年ほどまえ英国人R・ジェイムズの手記(一六一九—二〇)にあらわれ、その後十七—十八世紀からは二十数篇がわずかに残っている。十九世紀の初頭には七〇以上のブイリーナを収めたK・ダニロフの『古代ロシア詩集』がはじめて出版されたが、近代的な研究者による本格的な集録がはじまつたのは二十世紀の後半で、P・キレーフスキイ、P・ルイブニコフ、A・ギリフェルデング、V・ミルレルらが精力的な活動を展開した。ソヴィエト

時代になってからも、BおよびY・ソコロフ兄弟、A・アスタホヴァらの貢献がいちじるしい。ある計算によれば、現在およそ一〇〇の主題について二〇〇〇ちかくのテキストが知られているという。

このように資料が存在する以上、一定の限られた時期におけるブイリーナの共時的な研究はある程度可能である。しかし通時的な研究となると、ことは複雑となる。そして従来、ブイリーナ研究家の主要な関心をあつめてきたのは、まさにその発生の問題であった。ところが、ブイリーナの発生に関する研究は、さきに述べた理由によって、つねに仮説にとどまらざるを得ない。D・チジェフスキも指摘しているように、まずブイリーナがキーエフ・ロシアの時代(十一十三世紀)にすでに存在していたかどうかということが問題になるし、もしそうだとすれば、なぜそれがキーエフを中心とするウクライナには全くつたわらず、ところもあるうに、さきにあげた北部地方やシベリアなどの辺境で生きのこったかという疑問が生ずる。ブイリーナの謎めいた神秘性はここに由来している。

むろん、これらの疑問については、かならずしも決定的なものではないにせよ、いくつかの説明があたえられてきた。たとえば、ブイリーナが北部地方に集中的に保存されていたのは、かつてこの地方はモスクワやノヴゴロトと外国をむすぶ交易路にあたり、高い文化的水準をほこっていたが(このころ、ブイリーナの伝達者と考えられる民衆的な芸人——スコモロヒがこの地方にあつまった)、ピョートル一世のバルト海進出によ

ってその商業的意義を失い、代りに過去の文化的伝統へのつよい執着がこつたこと、農業以外の漁撈、狩猟などの生業と気象上の悪条件の組合せが叙事物語をたのしむ格好の余暇を提供したこと、などのためとされている。またウクライナから跡かたもなく消滅したのは、十六世紀ごろここに発生した新しい叙事的なジャンルであるドゥーマによって駆逐されたためと一般に考えられている。このように、ある特定の地方になぜブイリーナがつたわつたか、あるいはつたわらなかつたかについては、それぞれ特殊の説明が可能であらう。

より困難なのは、キーエフ時代におけるブイリーナの問題である。いつ、いかにして発生し、その初源的な形はどうであったか。成立当時の形はもはや知るべくもないが、その発生の時代についていえば、十九世紀以後のブイリーナ研究史にふかく立ちいらぬとしても、叙事詩の成立の淵源をすべて神話に求め、そこで歌われる主人公は何らかの神性をそなえているとした「神話学派」(A・アファナシエフ、O・ミルレル)、西欧やビザンツを含む東方諸国の叙事詩のテーマの影響ないし借用のもとにブイリーナが形成されたとみるA・ヴェセロフスキらの「借用派」、ブイリーナのなかに歴史的事実——それも古代ロシアの歴史的諸事件——の反映を読みとろうとした「歴史学派」を主要な潮流としてあげておく必要はあるう。これらのうち、ソヴィエトの研究に最も大きな影響をあたえているのは「歴史学派」で、その最初の提唱者はL・マイコフ、V・ミルレルらであり、M・スベランスキやソコロフ兄弟らはその代

表的な継承者である。

以下に紹介とあわせてその批評をこころみようとすむB・ル
インゴンの新著は、キーエフ・ロシヤにおいてプイリーナが
つ、いかにして発生したかを独自の立場からさぐるうとした芳
作である。著者はみずからの立場を「ソヴィエト的歴史学派」
と名づけてゐる。

(1) Пропп, В. Я., Русский героический эпос. Ленин-
град, 1955, стр. 507-510. 著者の「古典的」プイリーナ
がまだ完全にはさびたわけではなからことは、たとえは、一
九五六年にアルハンゲリスタの近くで新しい収録が行なわ
れたことから知られる。Малышев, В. И. Повесть о
Сухане. М.-Л. 1956, стр. 221-223.

(2) Сперанский, М. Н., Истории древней русской лиге-
ратуры, Изд. 3, М. 1920, стр. 2.

(3) Sokolov, Y. M., Russian Folklore, N. Y. 1950, p.
292

(4) Žiževskij, D., History of Russian Literature, from
the Eleventh Century to the end of the Baroque, the
Hague, p. 71

(5) Sokolov, op. cit., p. 292 ff.

(6) プイリーナとキーエフの關係については、Винograd-
ов В. В. и др. (ред) Основные проблемы эпоса восточ-
ных славян, М. 1958; Плисецкий М. М., Взаимосвязи
русского и украинского героического эпоса, М. 1963

参照。

二

ボリス・アレクサンドロヴィチ・ルイバコフは五八年以来
ソ連科学アカデミヤの会員で、現在同アカデミヤ付属の考古学
研究所長の職にある。主著は『古代ロシヤの手工業』(一九四
八)、『古代ロシヤ文化史』(一九四八—五二)、『手工業』を担
当)で、これらによって四九年と五二年の二度、スターリン賞
を受けている。

ルイバコフの最近作『古代ロシヤ、説話・プイリーナ・年代
記』は、第一部が説話とプイリーナ、第二部が年代記の二部か
らなっている。ここで問題とするのはおもに前者のプイリーナ
に関する部分である。

すでにG・フォードロフは本書について、キーエフ・ロシヤ
史学界における「新しい発言」Новое слово と評したが、たし
かに、このルイバコフの研究を通じての第一の特徴はその独創
性である。独創的であるために、必然的に論争的な性格が顕著
である。

著者はまず、プイリーナのほとんどすべての主題 сюжета
は九世紀から十二世紀三〇年代までのあいだに形成されたとい
う前提から出発する。本書における著者の目的は、プイリーナ
の諸主題の時代区分をこころみ、それぞれの作品を一定の歴史
的事件と結びつけることである。

ルイバコフによると、現在ソヴィエトのプイリーナ研究は大

別して二つの傾向に分けられるという(四一頁)。第一はこの口承叙事詩のなかにあくまでも過去の具体的、特殊な事実の反映を求めようとする立場である。このさいV・ミルレルらの「ブルジョア的」歴史学派との相違は、後者はプイリーナが社会の上層階級の産物で、支配者に対する頌歌から次第に民衆のあいだに普及したと考えるのに反して、ソヴィエトではプイリーナが民衆のなかから生まれてきたと主張する点にある。すなわちB・グレコフの「プイリーナは民衆自身によって語られた歴史である」というテーゼが「ソヴィエト的歴史学派」の出発点であるという。この派に属するものとして、ルイバコフはD・リハチョフをはじめA・ニキフォロフ、A・ロビンソン、V・チーチェレフ、M・プリセツキイなどの現代研究家をあげ、自分自身もここに含めている。

ソヴィエトのプイリーナ研究のもう一つの流れを、ルイバコフは「原始詩」派 *первобытно-поэтическое направление* と呼んでいる(四二頁)。この派の特徴は、プイリーナの主題のかなりの部分がすでに原始共同体の時代に神話的怪物との闘争をうたったものとして成立しており、歴史上の類似の事件や名前は偶然的にこれらの主題と結びついたものであるとすることである。これによると、プイリーナは特殊な歴史的事件を反映するものではなく、何世紀にもわたる民衆の理想を表現するものである。V・プロープがこの流派の主唱者で、B・プチャーロフ、U・ツァベンコがこれにしたがっている。

ルイバコフのこの分類は、かならずしも厳密な批判にたえず

るものではない。のちに述べるように、プイリーナで歌われるとされる歴史的事実とプイリーナそのものの発生の時間的なずれをみとめるかいなかの点で、ルイバコフとリハチョフのあいだに重要な意見の対立がみとめられるし、「ソヴィエト歴史学派」のなかでも、個々のプイリーナの成立事情に関しては、異なった意見が提出されている。さきにあげた研究家たちを一つの「学派」にまとめることには無理があるようである。一方、プロープのプイリーナ論をみれば、独自の歴史の志向がつよくあらわれている。彼は、「叙事詩の歴史的研究とは、ロシヤ史の発展のあゆみとの関係を解きあかし、その関係の性格を規定することである」と述べ、それをみずからの研究の方法としているのである。プイリーナは民衆自身の語る歴史であるというグレコフの規定は、ひとり「ソヴィエト歴史学派」のみにあてはまるものではない。

それにもかかわらず、問題をプイリーナの成立契機とその時期にしぼる限り、ルイバコフのいう二つの研究傾向のあいだの意見の相違ははっきりとうかび上がってくる。ルイバコフはプイリーナを歴史上の特殊な具体的事件と結びつける点で、「ソヴィエト歴史学派」中最も典型的な例を提示しているといえる。『古代ロシヤ……』は要するに、彼のいわゆる「歴史主義」をぎりぎりまでおしすすめて到達した地点であり、その立場からの「原始詩」派批判の書である。

(1) Феодров Г., История и поэзия. «Новый мир», М. 1964. No. 2, стр. 257. Фюрерプロープは歴史学者。文学史

家、民族学者の立場からの本書に対する論評は、筆者の知る限り、まだあらわれていない。

- (2) Греков, В. Киевская Русь. М. 1953, стр. 7
- (3) Пропл, op. cit., стр. 24
- (4) Пропл, op. cit., стр. 18
- (5) ルイバコフによると「プロップ一派は神話学派の誤りに古く歴史学派の誤りをつみかさねており、「過去の全遺産をニヒリスティックに否定することによって、袋小路におち入っている」という(四三頁)。

III

ルイバコフによる「バイリーナ成立のクロノロジー」を主人公別に整理すれば、およそつきぎのようになる。

- 九—十世紀 Иван Годинович, Михаил Порок, Дунай
- 十世紀 Микюла Селишинович
- 十世紀末期 Добрыня, Илья Муромец
- 十一世紀中期 Соловей, Волх Всеславич, Глеб Володьявич
- 十一世紀末期—十二世紀初期 Апракса, Анеша, Козарин,
- Данило Ингальевич, Стявр, Иван Гостиний, Святогор
- 十二世紀 Чурин, Дюк Степанович, Саул, Леванинович,
- Сухан Одихантъевич

このリスト自体は、もしバイリーナの主人公の歴史的な原型を年代別に目録化しただけであるとしたら、それほど独創的なものではない。しかしルイバコフにあっては、これら主人公に

関するほとんどすべてのバイリーナの主題が、すでに主人公と同時代に成立したと主張されている点に大きな特色がある。これほど大胆な意見は「ソヴェエト歴史学派」に属する他の研究者からはまだ出されたことはない。

ちなみに、リハチョフはバイリーナが十四—十七世紀の歴史の主題、モチーフ、エピソードをすくなくらず取入れていることをみとめている¹⁾、逆に九世紀以前の現実が反映しているとも説いている²⁾。またチーチェレフは、たとえばイリヤ・ムイロメツの登場するバイリーナのいくつかが十六世紀以後の創作にかかるものであると考えている³⁾。

しかし何よりもルイバコフの方法を具体的に検討してみなければならぬ。例をあげよう。

「ヴォリガとミクラー」は若い公ヴォリガと百姓ミクラーの力くらべを歌ったバイリーナである。ヴォリガは古くから、伝説的なリューリクの後継者のオレーク、あるいは「イーゴリ遠征物語」の主人公の祖父であるチェルニゴフのオレークに比定され、またこの詩には百姓が登場して重要な役割を果たすところから、キーエフ時代よりはるかに成立したものである⁴⁾というのが通説となっている(ルイバコフのいうようにプロップだけが十五—十六世紀説をとっているのではない)。これに対してルイバコフは、ヴォリガを十世紀のスヴァトスラフの子オレークとする。原初年代記によれば、このオレークは九七五年にある理由からノルマン系ヴァリヤーク人スヴェネリドの子リユートなるものを殺害した。スヴェネリドはオレークの子キーエフ公

ヤロポルクの重臣であった。殺された子ゆえの恨みから、スヴェネリドはヤロポルクをそのかし、オレークを死に至らしめた(九七七年)。ルイバコフは年代記のこの記事をもとに、オレークがリユート殺害後、自己防衛上、戦士をあつめる必要があったこと、それもヴァリヤーク人ではなくスラヴ人のなかに味方を求めなければならなかったと想像し、ミクーラを彼の募兵に応じてあつまった百姓のひとりと推断しているのである。主題の成立は九七五―七七七年のあいだとされる(五二―五八頁)。このブイリーナは現在およそ三十篇ほどのテクストが知られている。そのあるヴァリアントには *Санта* なるものがあり、それがスヴェネリドと考えられること、また年代記のオレーク同様、主人公が橋から落ちて死ぬというエピソードを含むヴァリアントも存在すること、などを著者は傍証として挙げている。

イリヤー(ムロメツ)もまた百姓の子である。いわゆるヴラデーミル・サイクルに属するこの最も有名な勇士は、ルイバコフによると、ヴァリヤークの傭兵をしりぞけスラヴの兵士を新しい国家の防衛者として採用しようとしたヴラデーミル大公の政策によって、国民的名声を得る機会をあたえられ、叙事詩のなかに登場したものであるという。スラヴの戦士の擡頭は、大兵のベチエネーク人と決闘してこれを打殺す「皮なめしの若者」(九九三年)、キーエフの衛星都市ベルゴロトの英雄的な籠城(九九六年)などの年代記の記事でも明らかである。そしてイリヤーが長年の宿痾から奇跡的に回復し、「うぐいす」賊を

やぶってキーエフへの道をひらくことなどをテーマとしたブイリーナは、十七世紀末の現実の反映である——と著者は断定を下しているのである(七二―七七頁)。

右の例が示しているように、ルイバコフのブイリーナ論の特質は、(1)叙事詩成立の契機として十一世紀における反ヴァリヤーク的気運(十一―十二世紀ではポーロヴェツとの闘争)の重視、(2)年代記記事への緊密な依存関係、(3)歌われる事件との関係における作品成立の即時性、などである。このほか、ごく初期のものとされる二、三の主題の成立時期の設定にみられる考古学資料の重視を、これにつけ加える必要がある。

- (1) Арипанова-Леретц, В. Л. (ред.), Русское народное поэтическое творчество, т. 1, М.-Л., 1953, стр. 185. Г. Акимовича в буйрианах тема, которую описывают события, о которых говорится, и т. д. Основные проблемы эпоса восточных славян, стр. 62

(2) Русское народное поэтическое творчество, стр. 188

(3) Ухов, П., Билины, М., 1957, стр. 445

(4) *ibid.*, стр. 480

四

およそ叙事詩は、民族の力の若々しく盛り上がった時代の所産といわれる。古代ロシアにおいても十世紀末―十二世紀初頭

はまさにそのような時代であった。ルイバコフはこの百数十年間のなかでも、とくに十世紀末のヴラデーミル・スヴァトスラヴィチ（聖公）の治世、一〇六八年のキーエフの暴動、十一世紀末から十二世紀初頭のヴラデーミル・モノマフの治世の三つの時期に民族意識の高揚をみとめ、おもなブイリーナの成立をこれらの時期と結びつけているのである。そして著者は、十二世紀のはじめ「異教のともがらを討伐にむかった戦士たちが国境の丘のかなたにかくれ、戦火がロシア本土から遠のくと、勇士たちをたたえる民謡の泉はかれてしまった」（一一三頁）と述べ、これ以後、ブイリーナがあらたに作られることはなかったとしている。しかし、現存するテクストのブイリーナが実際に記憶しているのは、むしろモンゴル金帳汗国の支配に対するロシアの勇士たちの抵抗である。ルイバコフの説明では、十三—十五世紀の「タタールのくびき」の時代に、キーエフ時代と同じように「民謡の泉」がわき出したという可能性を排除できない。つまり著者は、みづからが提出した仮説である前提条件を論証するにいたっていない。

年代記との関係についても疑問がもたれる。年代記は要するにロシア諸公家の記録である。初期の年代記には統一国家の歴史という側面がつよいといっても、その記事はごく簡単であった、あらゆる国家的な事件を網羅的に記録しているわけではない。十一世紀の中頃までは空白の年もすくなくない。文字によってしるされた歴史的事件のなかにのみブイリーナの主題を求める方法は、つねに資料不足という限界に衝突せざるをえない

のである。さらにブイリーナが民衆のものとして発生したことを出発点としている以上、支配者の側の文書である年代記その他の文献とブイリーナの関係は、資料の多寡というよりもっと深い部分において、比較困難という壁に直面するはずである。いわゆる「歴史主義」は貫徹されないのである。

著者は、ブイリーナがキーエフの地の住民たち、および首都の周囲にヴラデーミルが新たに建設した要塞都市の戦士たちによって作られたとし、同時代の年代記と同一の志向をもっていると断言しているが（一八八頁）、これは事態の過度の単純化である。たとえば、年代記に登場するヴラデーミル・スヴァトスラヴィチの叔父トブレイニャとブイリーナの勇士ドブレイニャの相違を考えてみれば、このことはただちに了解される。おそらく勇士ドブレイニャの原型が十一世紀に成立していたことは間違いないであろう。しかし原初年代記は廷臣ドブレイニャに英雄的性格をあたえていない。そこでは祖国の守護者英雄としてあらわれるのはもっぱらヴラデーミルである。ドブレイニャは思慮ぶかい忠告者として描かれている。ありようは、年代記とは無関係に民衆のあいだにドブレイニャ像が形成されていったのではないか。そしてこれを基礎にして、ドブレイニャ以前からつたわる口承作品の主人公として彼がとり入れられたり（たとえば「ドブレイニャとアリョーシヤ」）、あるいはドブレイニャ自身の行動と結びついた作品が成立したり（「ドブレイニャと大蛇」）、さらにはドブレイニャに全く関係のないのちの事件を主題とする作品に彼が主人公として登場したり——と

いうよりドブルーニヤに仮託して新しい作品が創造されたりして(「ドブルーニヤとマリムカ」)、一連のドブルーニヤ・ブリーナ群が成立したとみるべきではないだろうか。

ブリーナの主題の一つ一つについて、ルイバコフの示しているきわめて独創的な見解に検討を加えていくことは、ここではひかえよう。それにしても、著者がロシアの叙事詩のすべてのジャンルについて、発生期 *время сложения* と普及期 *время бытования* の二つを区別していることは、やはり見逃すことができない。彼によると前者は叙事詩が積極的な形態をもつ時期であり、後者は消極的な形態を呈する時期である(一一頁)。神話的な説話、種族の酋長に関する説話につづく第三のロシア叙事詩であるブリーナは、九—十三世紀が成立期、十六—十七世紀が普及期にあたっていているという。この成立期と普及期におけるブリーナの比較が、本書では問題の埒外におかれて⁽⁴⁾いることは残念である。

もうひとつ。「イーゴリ遠征物語」で言及されている「靈妙なボヤーン」とブリーナの関係を論じている部分も注目に値いする。「ボヤーンの作品の対象とされている主題に由来するブリーナは一つもない」(八〇頁)という断言は性急で、ルイバコフの自己矛盾でもあるが(たとえば、フェーストラフ公は双方の作品の主人公となっている。八五—九七頁)、ボヤーンがもっぱら宮廷詩人であって、ブリーナが作られ歌われていた社会層とは全く無縁だったという説明は、古代ロシアの叙事文学の諸伝統について考えるさいに、無視できぬ意味をもつ

ている。

ルイバコフのブリーナ論は、結局のところ、主として年代記などの書かれた歴史のなかにこの口承叙事詩の源泉をさぐるうところのみたものであるが、個々の作品の独自の性格や、その思想的内容への配慮にかけている。ブリーナのように発生がふるくその初源的な形が全く知られていない文学作品を研究する場合、*explanatio ex silentio* はもとより警戒すべきであるが、*explanatio ex litterarum* も別な危険をともしないいうことを、この著書は示しているといえないだろうか。

(1) 約一六〇のテキストが現存する最も有名なブリーナのひとつ。プロープはこの主題をきわめて古いものとし、ドブルーニヤやアリオシヤはのちにこの既存の主題に結びついたと考える(Иппов, op. cit., стр. 268)。ウホフも主人公のドブルーニヤの性格のゆえに、他のブリーナ群から移ってきたものとしている(Ухов, op. cit., стр. 468)。ルイバコフの理論はこのようにノヴェル的なブリーナの発生を説明できない。著者自身もこのことをみとめている(七一頁)。

(2) ミルレル以下多くの研究者(ルイバコフを含めて)は、このブリーナがロシアのキリスト教改革と関係があると考えている。蛇はキリスト教に敵対的な異教の象徴とみるわけである。プロープはこれに反して、大蛇がキーエフ・ロシアの成立以前の歴史を芸術的に形象化したものと

いう立場をとっている (*Ippom op. cit., cfp. 186*)。しかし
いずれにしても、このフィリーナの初源的な形態が十世紀
にすでに成立していたことは一般に承認されている (*XX*
op. op. cit., cfp. 465)。現在までに収集されているテクス
トは約四〇。

(3) マリンカは十六世紀末の偽ドミトリーの妻マリリーナと
される。一説には十七世紀の作品 (*Xxob, op. cit., cfp.*
478)。テクストは四〇とすこし。

(4) ルイバコフは普及期という言葉のほかに「第二、第三

の生命」という表現も用いている (一〇頁)。フィリーナ
のこの生命力を重視すれば、たとえば、「ドブルーニャと
アリオシヤ」のようなノヴェル・フィリーナの説明はつ
くが、彼自身の作業仮説はくずれてしまう。

(5) もっとも、古来その発生についてはさまざまな意見が
出されているフィリーナ「ソロヴェイ・ブジミロヴィチ」
は、ルイバコフによるとポヤーンの唯一のフィリーナでは
ないかという (八〇頁)。

(一九六四・八・二六) (一橋大学非常勤講師)